

新約聖書「ローマ人への手紙」における裏返し構造： Drake モデルにみとめられるキアスムスに基づく検証*

大喜多 紀明

The Reversal Structure of the Epistle to Romans in the New Testament: A Verification Based on Chiasmus as Seen in the “Drake Model”

Noriaki OHGITA

要旨：本稿では、新約聖書に収納された「ローマ人への手紙」をテキストとした分析をおこない、このテキストが裏返し構造からなるかの検証をおこなった。その際、Drake が考案したキアスムスを前提とした。本稿の検証によれば、当該テキストは裏返し構造であることがわかった。本稿の知見により、新約聖書に収納された 21 編の「手紙」のうち 10 編が調査され、そのすべてが裏返し構造であることがみとめられた。

キーワード：裏返し構造 キアスムス 新約聖書 構造分析

1. はじめに

大林（1979）の知見によれば、異郷訪問譚における構造上の特徴は裏返し構造である¹。大林の推認に関する蓋然性については、加藤（1979）、依田（1982）、大喜多（2018a）、大喜多（2020a）などがおこなった。ここ示した大林の推認に関する検証においては、いずれも、かかる蓋然性が高いという知見が示された。

一方、裏返し構造がみとめられる範囲が異郷訪問譚に限定されるのか否か、については、大林（1979）では今後の検証課題として位置づけた。かかる課題については、アイヌ口承文芸テキストにおいて（大喜多：2018b）、あるいは、聖書テキストにおいて（大喜多：2017）、異郷訪問譚ではないにもかかわらず、裏返し構造がみとめられる実例があることが示された。以上は、裏返し構造が異郷訪問譚に限定的にみとめられる特徴的構造とはいえないことを示している。ただし、こうした特徴が、アイヌ口承テキストおよび聖書テキストにおける構造

¹本稿ではこれを「大林の推認」と呼ぶ。

上の特性であるのか、については、検証事例が十分とはいえないことから、明確な因果関係が確立されているわけではない。とりわけ、聖書テキストにおいては、著者の属性や執筆時期などが一様であるとはいえない（例えば、辻：2005）。以上は、聖書においては、個別の判断が必要であることを示している。

筆者の一連の前稿においては、新約聖書を題材に、異郷訪問譚とはいえないにもかかわらず裏返し構造がみとめられることの蓋然性に関する調査をおこなってきた。とくに、手紙形式のテキストにおける一連の調査の結果は以下の通りである。なお、表における「裏返し構造」の欄に「○」が付されているものは、裏返し構造がみいだされたテキストを指す。一方、付されていないものは、未調査であることを示している。「論文」欄は、該当するテキストの裏返し構造が掲載された論文である。

テキスト	裏返し構造	論文
ローマ人への手紙		
コリント人への第一の手紙		
コリント人への第二の手紙		
ガラテヤ人への手紙		
エペソ人への手紙		
ピリピ人への手紙		
コロサイ人への手紙		
テサロニケ人への第一の手紙		
テサロニケ人への第二の手紙		
テモテへの第一の手紙		
テモテへの第二の手紙		
テトスへの手紙	○	大喜多（2021a）
ピレモンへの手紙	○	大喜多（2019a）
ヘブル人への手紙	○	大喜多（2021a）
ヤコブの手紙	○	大喜多（2019b）
ペテロの第一の手紙	○	大喜多（2022a）
ペテロの第二の手紙		
ヨハネの第一の手紙	○	大喜多（2022b）
ヨハネの第二の手紙	○	大喜多（2020b）
ヨハネの第三の手紙	○	大喜多（2021b）
ユダの手紙	○	大喜多（2020c）

新約聖書には、題名に「手紙」と明記されたテキストが合計 21 種類存在する。そのうち、9 種類がすでに調査され、そのすべてが裏返し構造であることがみいだされた。本稿では、今まで調査されていないテキストであるローマ人への手紙に注目し、このテキストがはたして

裏返し構造であるかの検証をおこなうことにする。

2. テキスト

本稿では、新約聖書に収納されたローマ人への手紙をテキストとする。なお、テキストの著者はパウロである。本テキストは、かかる著者が、ローマに在住するキリスト教信徒に向けて書かれた手紙としての形式からなる。かつ、テキストの名称においても手紙であることが明記されている。本テキストが手紙であるからには、通念から判断すれば、異郷訪問譚とはいえない。

ここで、ローマ人への手紙が本来は 15 章 33 節で閉じられていたのではないか、などの争点がある（例えば、大川：2020）。また、この手紙が二つの文書が接合することにより構成されたとする説もある（木下：1975）。本稿では、こうした形式的議論などには考慮せず、あくまでも現状のテキストを対象とした検証をおこなうことにする。

2.1. テキストは異郷訪問譚といえるか

前述のように、通念に基づけば、テキストは異郷訪問譚ではない。だが、念のため、本テキストを一般的な異郷訪問譚の概念と照合することにより、はたしてテキストが異郷訪問譚といえるかの確認を本節において試みることにする。

異郷訪問譚とは、物語の主人公が、主人公にとっての異郷を訪問する形式による物語のことをいう。勝俣（2009）は、異郷訪問譚の特徴を次のように説明した。

異郷訪問譚とは、現世の地上世界、神話であれば葦原中国から、それ以外の異郷を訪れる話である。訪問者は神か人間であり、異郷へ行くためには、特殊な手段・方法が必要とされる。また、多くの場合、選ばれた少数者のみしか異郷を訪れることは出来ない。

テキストは、パウロがローマ人の信徒に向けて書いた手紙の形式である。したがって、そもそも主人公が登場する物語ではなく、ましてや主人公がどこか異郷へと訪問する形式でもない。以上は、テキストが異郷訪問譚とはいえないことを示している。以上は本稿の前提でもある。

3. キアスムスと裏返し構造

裏返し構造とは、キアスムスの構造上における下位概念である。まず、キアスムスとは、以下のような、対応する語・句・節などが同心円状に出現する構造のことをいう。

$$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow \dots (X) \dots \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$$

つまり、構造上の前半に出現したテーマが後半では逆の順序で出現するのである。ここで、

Xで示した要素は、構造上の中央に位置し、かつ、対応を持たない要素であり、「核」と呼ばれる場合がある²。物語の場合はXにおいてストーリーが折り返すことになる。なお、Xを持つ構造を、集中構造などと呼び、キアスムスと区別する場合がある。しかしながら、本稿ではこのような区別をおこなわないことにする。

3.1. キアスムスの規模による分類

キアスムスは、規模により分類されることがある。まず、例えば、‘eat to live, don’t live to eat’のような文章の場合、‘eat (A) to live (B) don’t live (B) to eat (A)’とみなすことができる (Vickerman : 2022)。さらに、この構文は、下記のキアスムスで表現することができる。

A eat
B to live
B´ don’t live
A´ to eat

こうした、語句を対応要素としたキアスムスは、規模としては小さいといえる。こうした小規模のキアスムスを、例えば Larrington (2002) や Vickerman (2022) らは、マイクロキアスムス (micro-chiasmus) と呼んだ。

それに対して、ヨハネによる福音書の 1 章 1 節から 1 章 18 節にみとめられるキアスムスの図式を次に示す (McCoy : 2003)。

A The Word with God the Father (1:1–2)
B The Word’s role in creation (1:3)
C God’s Grace to mankind (1:4–5)
D Witness of John the Baptist (1:6–8)
E The Incarnation of the Word (1:9–11)
X Saving Faith in the Incarnate Word (1:12–13)
E´ The Incarnation of the Word (1:14)
D´ Witness of John the Baptist (1:15)
C´ God’s Grace to mankind (1:16)
B´ The Word’s role in re-creation (1:17)
A´ The Word with God the Father (1:18)

ここでのキアスムスは、比較的規模が大きく、こうしたキアスムスはしばしばマクロキアスムス (macro-chiasmus) と呼ばれる (例えば、DeSilva : 2008、Vickerman : 2022)。一方、こうしたマイクロキアスムスとマクロキアスムスの区別は便宜上の区別であり、双方の境界線が

²本稿ではこれを「X」と呼ぶことにする。

明確なわけではない。

さらに、書籍全体を覆う規模のキアスムスも存在する。例えば、森（2007）は、ルカによる福音書全体にわたる一つの大きなキアスムスを紹介した。こうした書籍やテキストなどの全体にわたる構造を、書籍レベル（book-level）の構造と呼ぶ（例えば、Heath : 2012、Newton : 2016）。これを踏まえ、本稿では、こうしたテキスト全体にわたる規模のキアスムスを書籍レベルのキアスムス（book-level-chiasmus）と呼ぶことにする。

3.2. 裏返し構造

前述のように裏返し構造は、キアスムスにおける構造上の下位の概念である。大林（1979）は、裏返し構造の特徴が下記の A および B で示されることを述べた。

A : 物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する³。

B : 物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する⁴。

本稿では、特徴 A と特徴 B の双方の特徴をそなえた構造を裏返し構造と呼ぶ。ここで、特徴 B は、キアスムスの構造的特徴でもある。つまり、裏返し構造とは、キアスムスであり、かつ、特徴 A の特徴を持つものをいう。

なお、本稿では、書籍レベルのキアスムスであり、かつ、裏返し構造でもある構造に注目することにする。

4. ローマ人への手紙における書籍レベルのキアスムス

本節では、テキストを書籍レベルのキアスムスの観点から検証した先行研究を紹介する。そもそも、当該テキストにおける書籍レベルのキアスムスについては、Welch（1981）が以下のように述べた。

With Romans, the absence of an overriding stylistic structure is also not surprising. Paul writes in Romans with a sense of doctrinal sophistication. His attention appears to turn to substance and content rather than form or style. Only in a loose sense is the letter divided into two halves: The first half, chapters 1–7, presents the problem of the human situation, and the second half, chapters 8–16, explains its solution. The problem, which is approached from several angles, is that man can only become righteous by becoming righteous inwardly; yet human conduct for Paul is not inward, but outward; therefore, the problem for man is to become „spiritually minded” when becoming such is not an inherent human capability.

³本稿ではこれを「特徴 A」と呼ぶ。

⁴本稿ではこれを「特徴 B」と呼ぶ。

つまり、Welch (1981) は、テキストに書籍レベルのキアスムスがみとめられることについて否定的な見解を示した。

しかし、その後、いくつかの書籍レベルのキアスムスが発表されている。Buys&Muswubi (2015) は、その論文で、Mitchell (1993) に掲載されたとされるローマ人への手紙における全テキストにわたるキアスムス⁵を引用した。以下はその図式である⁶。

- A. **Introduction: 1:1-6:** The author and addressees are introduced, greetings are given and obligation to preach
- B. **To all nations** is described (1:5);
- C. **Greetings: 1:7:** Greetings are given to the beloved of God, who are called to be saints;
- D. **Paul's visit to Rome: 1:8-15:** Paul's prayer and longings (plans) to pay debts in mission outreach is described 1:14;
- D. **Paul's motivation: 1:16-17:** The gospel is the power of God to save both the Jews and the Gentiles who believes (1:16,17);
- E. **Teaching: 1:18-15:13:** Paul introduces his doctrine (1-11) and addresses practical issues (12:1-15:13);
- D' **Paul's motivation: 15:14-21:** Specifically he describes his mission to win obedience from the Gentiles(15:15-16);
- C' **Paul's visit to Rome: 15:22-33:** Paul requests the church in Rome to be his mission base and partner to Spain(15:23-28);
- B' **Greetings: 16:1-24:** Final greetings are given to the partners of the gospel — the house churches 16:5,14-15;
- A' **Conclusion: 16:25-27:** Paul states 'my gospel and the proclamation of Jesus Christ ... has been made known to all the nations'(16:25,26).

Mitchell モデルでは、A・B と A'、C と B'、D と C'、D と D' という 4 組の要素対と、X である E により、テキストが構成されている⁷。この Mitchell モデルは、E が占める領域が極めて大きいという特徴を持つため、この構造はインクルージオであるともいえる。なお、

⁵Mitchell (1993) の書誌情報を Buys&Muswubi (2015) は「Mitchell, R., 1993, *The Apostle Paul's vision for world mission*, viewed 05 April 2014, from <http://www.onechallenge.org>」と記載したのだが、この URL からは、該当するウェブページに誘導されない。筆者は Mitchell (1993) を探し出すことができなかったため、本稿では、Buys&Muswubi (2015) が提示したものを、Mitchell (1993) が作成した図式とみなすことにした。

⁶本稿ではこの図式を「Mitchell モデル」と呼ぶことにする。

⁷Mitchell モデルでは、アルファベットの同一性に基づく対応の表記となっていない。つまり、変則的な表記である。

インクルージオとは、テキストの冒頭箇所と末尾箇所に限定的な対応関係がみとめられる構造をいう。一方、キアスムスの場合はインクルージオとは異なり、対応する語・句・節などの出現が、冒頭と末尾箇所に限定されず、当該テキストの全域においてみとめられる。

続いて、以下は Drake (1996) である。この図式⁸は、Drake による 1996 年に「The Book of Romans : A Believers' Church Manifesto?」という題名の TH. M. Thesis (faculty of Golden Gate Seminary) に基づいたものである⁹。

Rom. 1:1-7	A Epistolary Frame
Rom. 1:8-15	B Prayer of Thanksgiving
Rom. 1:16	C Theme Statement
Rom. 1:17-8:11	D One family of God--Theology
Rom. 8:12-39	E The need for obedience to God
Rom. 9:1-11:36	F The one family of God
Rom. 12:1-2	E' A plea to be obedient to God
Rom. 12:3-15:6	D' One family of God--Ethics
Rom. 15:7-12	C' Theme Recapitulation
Rom. 15:13	B' Prayer of Blessing
Rom. 15:14-16:27	A' Epistolary Frame

Drake モデルによれば、テキストは、A と A'、B と B'、C と C'、D と D'、E と E' という 5 組の要素対と、X としての F により構成されている。

森 (1996) は、テキストの冒頭と末尾が対応関係にあると考えられてきたことを紹介した。

⁸本稿ではこの図式を「Drake モデル」と呼ぶことにする。

⁹筆者は、この修士論文を入手することができなかった。そのかわりに、Drake の修士論文を転載した web ページのデータを本稿では使用した。なお、当該論文の題名は、web ページ上では、「The Book of Romans: A House Church Manifesto?」に変更されている。かかる web ページへの転載について、Darke は当該 web ページ上で次のように述べた。「This publication was originally a Th. M. Thesis presented to the faculty of Golden Gate Seminary in May, 1996, under the title "The Book of Romans: A Believers' Church Manifesto?" In keeping with the usage of the term "house church theology" in place of "believers' church theology" on the HCC site, and in order to take full advantage of the linking capability of electronic media, some editing has been done. You may freely reproduce and distribute this work provided that that no changes are made, no revenues are collected beyond the nominal cost of media, and credit is given to the author and to Golden Gate Seminary. Any other use requires the written permission of the author. Citing this material on other Internet sites is encouraged, but is to be done only by providing a hypertext reference to this file on this server.」。なお、当該 web ページ上には、「The Book of Romans: A House Church Manifesto?」の公開日が記載されていない。そこで、本稿では、Drake モデルの直接の出典である web ページ上の論文を、便宜上、Drake (1996) と表記することにした。

ミッシェルやトロクメをはじめ多くの者は、1 : 8-15 と 15 : 14-33 がローマ書の本論を囲む枠としてインクルージオをなしていることを示唆している。この二つの部分を突き合わせてみると、たしかに文体やモチーフにおいて、いくつかの類似点 (*tertium comparationis*) が認められる。

そのうえで、当該テキストが、合計 67 組の要素対と X により構成されたキアスムスであることを紹介した。対応の詳細はここでは引用しないが、章ごとの対応数を森 (1996) は次のように述べた。

章単位で対応をまとめると次のようになる。

- 1 章——15 章、16 章 (対応は 17 対)
- 2 章——13 章、14 章 (" 11 対)
- 3 章——11 章、12 章 (" 12 対)
- 4 章——10 章+11 : 1 (" 5 対)
- 5 章——6 章~9 章 (" 22 対) 計 67 対

なお、森 (1996) の図式¹⁰によれば、X は 5 章 21 節である。ただし、森モデルでは、対応の順序が逆転し、整合性の乱れがみとめられる箇所もある。このことについて、森 (1996) は次のように述べた。

対応によっては一部、節の順序が変わり、整合性の乱れたところもあることを付言しておく。

さらに、森モデルでは、7 章 14 節~8 章 22 節、9 章 1 節~21 節、16 章 1 節~16 節という比較的まとまった箇所がキアスムスの埒外であり (森 : 1996)、この点は、森モデルにおける構成上の課題である。

Robinson (2019) は、下記の、12 組の要素対と X を持つキアスムスを提案した¹¹。

- A) Romans 1:1-17 — Bringing the Gospel to Rome
- B) Romans 1:18-32 — God's Wrath on Mankind For Refusing to Glorify God
- C) Romans 2:1-16 — Do Not Judge in Hypocrisy, For God Will Judge You
- D) Romans 2:17-29 — Live According to the Law, Not in Hypocrisy
- E) Romans 3:1-20 — Both Jews and Gentiles Are Guilty Because of Their Unbelief
- F) Romans 3:21-4:8 — Justification by Faith

¹⁰本稿ではこれを「森モデル」と呼ぶことにする。

¹¹本稿ではこれを「Robinson モデル」と呼ぶことにする。

- G) Romans 4:9-25 — The Promise of Justification by Faith Not Limited to Jews Alone
- H) Romans 5:1-11 — Hope Through Justification in Messiah
- I) Romans 5:12-19 — Contrasting the Effects of Adam's Sin vs. Yeshua's Righteousness
- J) Romans 5:20-21 — The Stirring Up of Sin Effect of the Law
- K) Romans 6:1-11 — Our Death in Messiah Freeing us From Sin
- L) Romans 6:12-13 — The Command to Present Ourselves as Slaves of Righteousness
- X) Romans 6:14 — The Grace of God Brings Freedom From Sin
- L´) Romans 6:15-23 — Practical Instructions on How to Present Ourselves as Slaves of Righteousness
- K´) Romans 7:1-6 — Husband's Death Freeing the Woman from the Sin of Adultery (If She Remarried Before His Death)
- J´) Romans 7:7-25 — Practical Example of How the Law Stirs Up Sin
- I´) Romans 8:1-17 — Contrasting the Effects of the Flesh vs. the Spirit
- H´) Romans 8:18-39 — Persevering in Hope For Future Glory
- G´) Romans 9:1-29 — Being a Child of Abraham Not Available to "Jews" Alone
- F´) Romans 9:30-10:13 — Justification by Faith
- E´) Romans 10:14-11:36 — Both Jews and Gentiles Given Mercy and the Gospel Despite Their Unbelief
- D´) Romans 12-13 — Live the Truth of the Law Without Hypocrisy
- C´) Romans 14:1-15:6 — Do Not Judge Fellow Believers, For God Will Judge Us
- B´) Romans 15:7-13 — Gentiles Are Destined to Glorify God by His Mercy Through Messiah Yeshua
- A´) Romans 15:14-16:27 — Bringing the Gospel to Rome

なお、このキアスムスのXは6章14節である。

さらに、村井（2021）は、15組の要素対とXを持つ、下記のキアスムスを示した¹²。

1 序 (1:1-7)

2 ローマ訪問の願い (1:8-15)

¹²本稿ではこれを「村井モデル」と呼ぶことにする。

- 3 福音の力 (1:16-17)
- 4 人類の罪 (1:18-32)
- 5 神の正しい裁き (2:1-16)
- 6 ユダヤ人と律法 (2:17-29)
- 7 正しい者は一人もない (3:1-18)
- 8 信仰による義 (3:19-31)
- 9 アブラハムの模範 (4:1-12)
- 10 信仰によって実現される約束 (4:13-25)
- 11 信仰によって義とされて (5:1-11)
- 12 アダムとキリスト (5:12-21)
- 13 罪に死にキリストに生きる (6:1-23)
- 14 結婚の比喻 (7:1-6)
- 15 内在する罪の問題 (7:7-25)
- 16 霊による命 (8:1-17)
- 17 将来の栄光・神の愛 (8:18-30)
- 18 キリストにおける神の愛 (8:31-39)
- 19 神の怒りと憐れみ (9:1-29)
- 20 イスラエルと福音 (9:30-10:21)
- 21 万人の救い (11:1-10)
- 22 イスラエルの残りの者・異邦人の救い (11:11-24)
- 23 イスラエルの再興 (11:25-36)
- 24 キリストにおける新しい生活・キリスト教的生活の規範 (12:1-21)
- 25 支配者への従順 (13:1-7)
- 26 隣人愛・救いは近づいている (13:8-14)
- 27 兄弟を裁いてはならない・兄弟を罪に誘ってはならない (14:1-23)
- 28 自分ではなく隣人を喜ばせる・福音はユダヤ人と異邦人のためにある (15:1-13)
- 29 宣教者パウロの使命 (15:14-21)
- 30 ローマ訪問の計画 (15:22-33)
- 31 個人的な挨拶・神への賛美 (16:1-27)

村井モデルのXは8章1節～17節である。

以上、提示された5種類のキアスムスを要素対の数とXにおいて比較した場合、下記のようになる。

モデル	要素対	X
Mitchell モデル	4	1章18節～15章13節

Drake モデル	5	9 章 1 節～11 章 36 節
森モデル	67	5 章 21 節
Robinson モデル	12	6 章 14 節
村井モデル	15	8 章 1 節～17 節

つまり、5 種類のモデルは、要素対の数、X の場所におけるすべてが異なっている。かかる要素対と X の差異は、何を基準として図式を作成するかにより生じるとされる¹³のだが、本稿では具体的な議論はおこなわず、別の機会におこなうことにする。

前節において、裏返し構造がキアスムスの下位概念であることを述べた。つまり、特徴 A と特徴 B の双方の特徴をそなえた構造が裏返し構造と呼ぶのであるが、特徴 B については、キアスムスの構造的特徴である。したがって、キアスムスであるからには、特徴 A が備わっていれば裏返し構造である。

以上より、本稿では、すでにキアスムスとしてみとめられている上述の図式について特徴 A が当てはめられるかを検証することにより、かかる図式が裏返し構造であるかの判別をおこなうことにする。ここで、5 種類のモデルのうち、Mitchell モデルはキアスムスでありながら、対応の配置が冒頭と末尾に偏っており、インクルージオの要素がみとめられる。また、森モデルでは、キアスムスとは埒外のまとまった箇所が存在する。本稿においては、残りの 3 種類のモデルのなかで最も対応数が少ない Drake モデルに注目し、まずはこれを検証の対象とする。なお、他のモデルについては別の機会に検討することにする。

5. Drake モデルにおけるキアスムス

本節では、Drake (1996) が述べた Drake モデルの要素対に関する説明を紹介する。

◆A・A´

Drake (1996) による A と A´ に関する説明は次の通りである。

AA´ Epistolary Frame

The epistolary frame, likewise common in Paul's letters, comprises the outermost layer of the epistle. The concluding section is particularly lengthy, presumably because the letter is to a number of churches and the Apostle feels the need to compliment all those who are of importance whether he has ever met them or not.

¹³村井 (2009) は、同一テキスト（ここではマルコによる福音書）内に複数のキアスムスが多層的にみとめられる事例を示した。本稿で紹介した 5 種類のキアスムスは、同一テキスト（ここではローマ人への手紙）内に、複数の異なるキアスムスが多層的に存在していることを示している。5 種類のキアスムスは、分析の観点の違いが反映したものであり、こうした観点の差異が X の位置の差異をもたらすといえる。

つまり、Drake に基づけば、ここでの対応には、双方ともに、パウロの書簡にしばしばみとめられるように、宛先への挨拶が書かれている。この箇所のテーマは挨拶であるといえる。

◆B・B´

Drake (1996) による B と B´ の説明は以下の通りである。

BB´ Prayers of Thanksgiving and Blessing

The letter begins and ends with traditional words of thanksgiving and blessing, somewhat adopted to the particular circumstances of Rome, and present in nearly all of Paul's other letters. The parallel structure of Rom. 1:14 is not to be understood to be equating Greeks with the learned and non-Greeks with non-learned, but simply as an expanded two-dimensional universe of diverse peoples, perfectly setting up the theme which follows.

つまり、Drake の知見によれば、B と B´ では、祈りをテーマとする対応関係がみとめられる。ただし、B は感謝の祈りであるのに対し、B´ は祝福の祈りである¹⁴。こうした対応は、Drake によれば、他のパウロの書簡にもみとめられる。

◆C・C´

続いて、C と C´ についてである。Drake (1996) は以下のように説明した。

CC´ The Theme Statement

The fullest theme statement appears in the theme position toward the end of the letter, "Accept one another, then, just as Christ accepted you in order to bring praise to God..." (Rom. 15:7). This statement continues through three Old Testament references that illustrate the need for Gentiles to praise God.

The initial Theme Statement (See Excursus I), located in Rom. 1:16, has identical content except that it is designed to introduce, rather than summarize, the main message to the Roman churches. The emphasis is on "everyone who believes," it being clear that by "everyone" Paul has in mind the Jew/Gentile heterogeneity to which he that he is calling, as it contains the phrase "first for the Jew and then for the Gentile," repeated twice in Chapter 2.

Drake の見解によれば、C および C´ には、双方ともに、このテキストにおける主たるメッセ

¹⁴Drake は、ここでの対応を、祈りをテーマとすることの同一性によって構成した。ただし、B と B´ は同じく祈りであるが、内容が感謝と祝福であり、双方は異なっている。本稿では Drake の見解にしたがい、ここでの祈りをテーマとする対応がキアスムスの構成要素となることを前提とする。

ージである、キリストがあなたがたを受け入れたように、互いに受け入れて、神をほめたたえることの必要性が述べられている。つまりテーマはキリストの下による相互受容である。C ではテーマが表明され、C´ ではかかるテーマが再提示される。

◆D・D´

D と D´ の対応については、Drake (1996) は以下のように説明した。

DD´ The Theology and Ethics of the One Family of God

The doctrinal section is masterful in its construction, alternating between the Gentiles and the Jews in its treatment--carefully balanced to prevent upsetting either side past the point of recovery. Paul first demonstrates the sin of the Gentiles (Rom. 1:16-32), and then turns to the sin of the Jews (Rom. 2:1-3:20)--both are just as guilty. Also, both can find justification (Rom. 3:21-4:24) only one way--through faith. The work of Christ, the Second Adam, is developed in the next section (Rom. 5:1-6:23); that work is sufficient--it is freely given to both Jews and Gentiles. Paul then turns to the work of the Law (Rom. 7:1-8:11), and reveals the real reason for the law: so that men and women might be aware of their sin. The struggles with sin continue even for the believer, but God has given each member of his family sufficient power to withstand it by the Holy Spirit. In this way, the Christian is not condemned, but will receive a resurrection comparable to that of Christ.

The D´ section, comprised of Rom. 12:3-15:6, is also theological but, since it follows the main message, is concerned with the embodiment of theology through the ethics of the one family of God. Of particular significance to this thesis, the ethics presented are almost entirely ecclesiological, beginning with a recapitulation of the "church is one body made of many parts" metaphor of 1 Corinthians 12. The huge block on love (Rom. 12:9-13:10) is to a large part devoted to love between Christians--that is, within the church. The remainder of Chapter 13 is laced with "our" and "us" material, again having to do with the church.

Drake によれば、この D と D´ は、ともに、パウロにおける、人類が神の下にある一つの肢体であり一つの家族であること（つまりは、神による一つの家族）という考えがテーマである。D がこのテーマに関する神学であるのに対し、D´ は、かかる神学が具現化された倫理についてである。

◆E・E´

E と E´ の対応については、Drake (1996) の見解は以下の通りである。

EE´ A Call for Obedience

For the majority of his audience, Paul is an "outsider" who has no basis for claiming authority.

He must therefore apply reason in order to convince and then inspire his listeners.

Having enumerated the things that God has done on their behalf, they have an "obligation" (Rom. 8:12) to behave appropriately. Paul begins section E (Rom. 8:12-39) quietly, but concludes to an emotional climax just prior to the all-important main message, F.

Falling immediately after the doxology that concludes the message of Chapters 9-11, the E' (Rom. 12:1-2) section is short but powerful. Paul tells his listeners that they must be prepared to make "a living sacrifice." They must be willing to do devote their lives as a proper worship of, and obedience to, God.

ここでの E と E' の対応では、双方ともに、人々が信仰に対し従順に従うことをパウロが要請している。つまり、神への従順がテーマである。

以上のように、Drake モデルには、A と A'、B と B'、C と C'、D と D'、E と E' といった要素対があり、それぞれの対応が、「挨拶」、「祈り」、「キリストの下による相互受容」、「神による一つの家族」、「神への従順」をテーマとしている。つまり、テキストでは、構造上の前半に出現したテーマが後半では逆の順序で出現している。また、F は X に相当し、対応は存在しない。したがい、この構造は 3 節のキアスムスの定義と合致するため、典型的なキアスムスである。なお、Drake モデルでは、各対応の関係性が対照的であるか否かに関する言及がない。つまり、Drake (1996) は Drake モデルが裏返し構造であるかの検証をおこなっていない。

5. Drake モデルは裏返し構造といえるか

本節では、Drake モデルがはたして裏返し構造といえるかについての検討をおこなうことにする。その際、キアスムスを構成する対応ごとに検証をおこなうことにする。

◇A・A'

まず、A と A' についてである。この箇所は挨拶がテーマである。A の該当する部分は次の通りである（日本聖書協会：1989）¹⁵。

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選り別たれ、召されて使徒となったパウロから—この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。わたしたちは、その御名のために、すべての異邦人を信仰の従順に至らせるようにと、彼によって恵みと使徒の務とを受けたのであり、

¹⁵本稿で聖書テキストを引用する場合はいわゆる口語訳聖書（日本聖書協会：1989）を使用する。

あなたがたもまた、彼らの中にあつて、召されてイエス・キリストに属する者となったのである。ローマにいる、神に愛され、召された聖徒一同へ。わたしたちの父なる神および主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

ここでは、この手紙の著者であるパウロが発信者であること、ローマの聖徒一同が受信者であることが書かれている。

一方、A´にも、発信者と受信者に関する記述がある。以下、A´の一部分である、発信者が示された箇所を示す。

きよい接吻をもって、互にあいさつをかわしなさい。キリストのすべての教会から、あなたがたによろしく。さて兄弟たちよ。あなたがたに勧告する。あなたがたが学んだ教にそむいて分裂を引き起し、つまずきを与える人々を警戒し、かつ彼らから遠ざかるがよい。なぜなら、こうした人々は、わたしたちの主キリストに仕えないで、自分の腹に仕え、そして甘言と美辞とをもって、純朴な人々の心を欺く者どもだからである。あなたがたの従順は、すべての人々の耳に達しており、それをあなたがたのために喜んでい。しかし、わたしの願うところは、あなたがたが善にさとく、悪には、うとくあつてほしいことである。平和の神は、サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。どうか、わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。わたしの同労者テモテおよび同族のルキオ、ヤソン、ソシパテロから、あなたがたによろしく。(この手紙を筆記したわたしテルテオも、主にあつてあなたがたにあいさつの言葉をおくる。) わたしと全教会との家主ガイオから、あなたがたによろしく。市の会計係エラストと兄弟クワルトから、あなたがたによろしく。[わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と共にあるように、アアメン。]

続いて、受信者が示された箇所の一部を次に紹介する。

キリスト・イエスにあるわたしの同労者プリスカとアクラとに、よろしく言ってほしい。彼らは、わたしのいのちを救うために、自分の首をさえ差し出してくれたのである。彼らに対しては、わたしだけではなく、異邦人のすべての教会も、感謝している。また、彼らの家の教会にも、よろしく。わたしの愛するエパネットに、よろしく言ってほしい。彼は、キリストにささげられたアジヤの初穂である。あなたがたのために一方ならず労苦したマリヤに、よろしく言ってほしい。わたしの同族であつて、わたしと一緒に投獄されたことのあるアンデロニコとユニアスとに、よろしく。彼らは使徒たちの間で評判がよく、かつ、わたしよりも先にキリストを信じた人々である。主にあつて愛するアムプリアトに、よろしく。キリストにあるわたしたちの同労者ウルバノと、愛するスタキスとに、よろしく。キリストにあつて鍊達なアペレに、よろしく。アリストブロの家の人たちに、よろしく。同族のヘロデオンに、よろしく。ナルキソの家の、主にある人た

ちに、よろしく。主にあって労苦しているツルパナとツルポサとに、よろしく。主にあって一方ならず労苦した愛するペルシスに、よろしく。主にあって選ばれたルポスと、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。アスンクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよび彼らと一緒にいる兄弟たちに、よろしく。

ここで、発信者にはパウロの名前が書かれておらず、そのかわりに「キリストのすべての教会」、「同労者テモテ」、「同族のルキオ」、「ヤソン」、「ソシパテロ」、「テルテオ」、「家主ガイオ」、「市の会計係エラストと兄弟クワルト」が共同の発信者であることが紹介されている。受信者についても、「同労者プリスカ」、「アクラ」、「彼らの家の教会」、「エパネト」、「マリヤ」、「アンデロニコ」、「ユニアス」、「アムプリアト」、「同労者ウルバノ」、「スタキス」、「アペレ」、「アリストブロの家の人たち」、「同族のヘロデオン」、「ナルキソの家の、主にある人たち」、「ツルパナ」、「ツルポサ」、「ペルシス」、「ルポス」、「彼の母」、「アスンクリト」、「フレゴン」、「ヘルメス」、「パトロバ」、「ヘルマス」、「彼らと一緒にいる兄弟たち」、「ピロロゴ」、「ユリヤ」、「ネレオ」、「その姉妹」、「オルンパ」、「彼らと一緒にいるすべての聖徒たち」、というように細かく列挙されている。

つまり、発信者については、A ではパウロのみであるが A' ではパウロ以外の名前が列挙され、受信者については、A ではローマの聖徒一同とのみであるが A' では細かく列挙されており、A と A' では、発信者、受信者ともに対照的な描き方である。

ただし、Drake モデルでは A' の範囲となる 15 章 14 節～15 章 33 節は挨拶の様子が描かれていない。むしろ、パウロが受けた恩恵と、ローマ信徒への祝福が述べられている。したがって、筆者としては、後述の B' に収納するべきであると考えた。本稿では当該箇所を B' に組み込むことにする。

◇B と B'

続いて B と B' についてである。ここでのテーマは祈りであるが、B では感謝であり、B' は祝福である。

B の箇所は次の通りである。

まず第一に、わたしは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられていることを、イエス・キリストによって、あなたがた一同のために、わたしの神に感謝する。わたしは、祈のたびごとに、絶えずあなたがたを覚え、いつかは御旨にかなって道が開かれ、どうかして、あなたがたの所に行けるようにと願っている。このことについて、わたしのためにあかしをして下さるのは、わたしが霊により、御子の福音を宣べ伝えて仕えている神である。わたしは、あなたがたに会うことを熱望している。あなたがたに霊の賜物を幾分でも分け与えて、力づけたいからである。それは、あなたがたの中にいて、あなたがたとわたしとのお互の信仰によって、共に励まし合うためにほかならない。兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。わたしはほかの異邦人の間で得たよう

に、あなたがたの間でも幾分かの実を得るために、あなたがたの所に行こうとしばしば企てたが、今まで妨げられてきた。わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある。そこで、わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。

ここには、ローマの信徒たちの過去の行為に対するパウロの感謝と、パウロ自身の願望が述べられている。

一方、B' の箇所は以下の通りである。

どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように。

この箇所はパウロによるローマの信徒たちへの祝福である。ここに、前述の 15 章 14 節～15 章 33 節を接続してみたい。この箇所には、パウロが受けた恩恵とローマ信徒への祝福が述べられている。ここで、祝福とは、将来の幸福を願うものである。

つまり、B では、ローマ信徒の過去の行為への感謝が述べられているのに対し、B' では、ローマ信徒への未来の祝福が述べられている。かつ、B では、パウロの未来に対する願望が描かれているのに対し、B' では、パウロが過去に受けた恩恵が描かれている。以上より、B と B' は対照的である。

◇C・C'

C と C' では、C において表明されたテーマが、C' において再提示される。C の該当箇所は以下の通りである。

わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。

それに対し、C' の該当箇所は以下の通りである。

こういうわけで、キリストもわたしたちを受けいれて下さったように、あなたがたも互に受けいれて、神の栄光をあらわすべきである。わたしは言う、キリストは神の真実を明らかにするために、割礼のある者の僕となられた。それは父祖たちの受けた約束を保証すると共に、異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようになるためである、「それゆえ、わたしは、異邦人の中であなたにさんびをささげ、また、御名をほめ歌う」と書いてあるとおりである。また、こう言っている、「異邦人よ、主の民と共に喜べ」。また、「すべての異邦人よ、主をほめまつれ。もろもろの民よ、主をほめたたえよ」。またイザヤは言っている、「エッサイの根から芽が出て、異邦人を治めるために立ち上がる者が来

る。異邦人は彼に望みを置くであろう」。

かかる C と C' は、Drake (1996) が言及したように、「キリストがあなたがたを受け入れたように、互いに受け入れて、神をほめたたえることの必要性」が述べられている。C においては、パウロが福音を受容したことが述べられ、かつ、その効果が「すべて信じる者に、救を得させる神の力」であることが述べられている。一方、異邦人における福音の受容については言及されていない。それに対し、C' では、パウロたちが福音をすでに受容していることを前提としながらも、当該箇所では、異邦人が福音を受容することの要請と、その効果としての、異邦人が「神の栄光をあらわす」ことが述べられている。つまり、C にはパウロの福音受容とその効果、C' には異邦人の福音受容とその効果が描かれている。ここで、パウロはイスラエル人であり、異邦人は非イスラエル人である。かかるイスラエル人と非イスラエル人は、とりわけユダヤ教徒にとっては極めて対照的な存在である（須藤：2006）。

◇D・D'

D と D' は神による一つの家族がテーマであるのだが、D がその神学であるのに対し、D' は倫理であると、Drake は述べた。ここで、D が何により構成されているかの実例を示したい。下記は、D の範囲に含まれる、2 章 1 節～13 節である。

だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正しく下ることを、知っている。ああ、このような事を行う者どもをさばきながら、しかも自ら同じことを行う人よ。あなたは、神のさばきをのがれうと思うのか。それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。あなたのかたくなな、悔改めのない心のゆえに、あなたは、神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものとを求める人に、永遠のいのちが与えられ、他方では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に従う人に、怒りと激しい憤りとが加えられる。悪を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、患難と苦悩とが与えられ、善を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、光栄とほまれと平安とが与えられる。なぜなら、神には、かたより見ることがないからである。そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法なしに滅び、律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。なぜなら、律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるからである。

ここで注目すべき点は、例えば、「あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定

めている」などのような、パウロによる自身の宗教概念が披歴されていることである。Drake は、かかる概念の披歴を「神学」と位置づけた。こうした宗教概念の披歴は、D のすべての領域においてみとめられる。

一方、D´についてである。以下はD´の一部分の12章6節～18節である。

このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。愛には偽りがあってはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。互に思うことをひとつにし、高ぶった思いをいだかず、かえって低い者たちと交わるがよい。自分が知者だと思いがあってはならない。だれに対しても悪をもって悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさい。あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。

ここで注目すべきは、例えば「慈善をする者は快く慈善をすべきである」のように、当該箇所においてはパウロが自身の宗教概念の実体化を信徒たちに要請している点である。Drake は、かかる宗教概念の実体化を「倫理」と称した。このような実体化の勧めはD´のすべての領域においてみとめられる。

つまり、D と D´の関係は、Drake によれば、パウロの神学と倫理の対応であるのだが、同時に、パウロの宗教概念とその実体化の要請との対応でもある。ここで、概念と実体とは対義語の関係であり対照的な概念である。したがって、D と D´は対照的な関係であるといえる。

◇E・E´

Drake によれば、E と E´は、神への従順がテーマであり、E では神への従順の必要性が、E´では、神への従順の要請が述べられている。かかる従順の必要性は、パウロによる神学に基づくものであり、換言すれば、宗教概念の披歴でもある。一方、かかる従順の要請は、パウロによる倫理でもあり、かつ、当該宗教概念の実体化を要請するものでもある。したがって、当該対応は、概念とその実体化との対応であるといえるので、双方は対照的な関係である。

◇F

Fは対応を持たない要素であり、当該キアスムスのXである。

以上より、当該キアスムスのすべての要素対における対応が対照的な関係であることがみとめられた。つまり、Drake モデルはそもそもキアスムスであるので特徴 B を満たしている。同時に、本節の知見に基づけば、特徴 A も満たしている。したがって、このキアスムスは、特徴 A と特徴 B の双方が当てはまるので裏返し構造である。

5. 結論

裏返し構造は、そもそもは、異郷訪問譚にみとめられる構造なのであるが、現在まで、新約聖書テキストでは、異郷訪問譚ではないにもかかわらず、裏返し構造がみとめられる事例がみいだされてきた。本稿の目的は、新約聖書テキストにおいて、異郷訪問譚ではないにもかかわらず、裏返し構造がみとめられる蓋然性の高さを検証することにある。本稿では、現在まで検証されてこなかったテキストであるローマ人への手紙に注目し、当該テキストに裏返し構造がみとめられるかの検証をおこなった。その際、本稿では、既知の書籍レベルのキアスムスである Mitchell モデル、Drake モデル、森モデル、Robinson モデル、村井モデルを紹介した。そのうえで本稿では Drake モデルを選択し、この構造が裏返し構造であるかの分析をおこなった。その結果、すべての要素対の対応関係が対照的であると確認されたため、Drake モデルを前提とすれば、当該テキストが裏返し構造であるとの評価を得ることができた。なお、その際、従来の Drake モデルにおいては A' の範囲に含まれていた 15 章 14 節～15 章 53 節を、むしろ B' に収納した方が対応における適合性があると筆者は判断した。以下は、筆者が新たに構成したキアスムスの図式である。

Rom. 1:1-7	A Epistolary Frame
Rom. 1:8-15	B Prayer of Thanksgiving
Rom. 1:16	C Theme Statement
Rom. 1:17-8:11	D One family of God--Theology
Rom. 8:12-39	E The need for obedience to God
Rom. 9:1-11:36	F The one family of God
Rom. 12:1-2	E' A plea to be obedient to God
Rom. 12:3-15:6	D' One family of God--Ethics
Rom. 15:7-12	C' Theme Recapitulation
Rom. 15:13-33	B' Prayer of Blessing
Rom. 16:1-27	A' Epistolary Frame

本稿の知見を含めれば、新約聖書における、題名に「手紙」と明記された合計 21 種類のテキストのうち、10 種類が調査され、そのすべてが裏返し構造であるということになる。以上より、現状においては、新約聖書テキストでは、異郷訪問譚ではなくとも裏返し構造がみとめられる蓋然性が高いといえる。

5. おわりに

本稿では、Drake モデルを検証することにより、ローマ人への手紙も裏返し構造からなることが確認できた。一方、このテキストには、他にも書籍レベルのキアスムスが認知されている。他のキアスムスについては、Drake とは異なる視点に基づいてテキストを分析した結果、同一テキスト内に多層的にみとめられたものであるといえる。こうした Drake モデル以外のキアスムスにおいても、裏返し構造といえるかの調査は今後おこなうつもりである。新約テキストに収納された「手紙」の残りの 11 種類についても引き続き検証する予定である。なお、本稿のような研究には、恣意性が介入しやすいという方法論上の課題がある。恣意性を排除するための方法論を検討すること自体も今後の課題である。

引用文献

- 大川 大地、2020、「ローマ書 16 章の宛て先問題再考：「エフェソ仮説」擁護の試み」『キリスト教学』、62、61-85、立教大学キリスト教学会。
- 大喜多 紀明、2017、「聖書「創世記」冒頭の 5 つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例」『北海道言語文化研究』、(15) 195-216、北海道言語研究会。
- 大喜多 紀明、2018a、「芥川龍之介『トロツク』の裏返し構造：良平の「新生」場面の機能」『国語論集』、(15)、45-52、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室。
- 大喜多 紀明、2018b、「新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された 5 つの物語の構造：「対称性仮説」の蓋然性」『北海道言語文化研究』、(16) 25-48、北海道言語研究会。
- 大喜多 紀明、2019a、「新約聖書に収納された「ピレモンへの手紙」にみられる裏返し構造」、『人間生活文化研究』、(29) 293-298、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多 紀明、2019b、「新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造：「物語」とはいえないテキストの事例」、『人間生活文化研究』、(29) 15-21、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多 紀明、2020a、「小山ゆう『チェンジ』にみられる裏返し構造：漫画作品における異郷訪問譚の事例」、『人間生活文化研究』、(30) 146-150、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多 紀明、2020b、「新約聖書に収納された「ヨハネの第二の手紙」の構造：裏返し構造をあてはめる観点からの分析」、『人間生活文化研究』、(30) 308-311、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多 紀明、2020c、「新約聖書「ユダの手紙」にみとめられる裏返し構造」、『人間生活文化研究』、(30) 353-357、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多 紀明、2021a、「新約聖書テキストにおける異郷訪問譚と裏返し構造の関係：「テトスへの手紙」と「ヘブル人への手紙」の場合」、『人文×社会』、(4) 79-96、『人文×社会』編集委員会。
- 大喜多 紀明、2021b、「新約聖書「ヨハネの第三の手紙」にみられる裏返し構造」、『人文×社会』、(1) 451-459、『人文×社会』編集委員会。
- 大喜多 紀明、2022a、「新約聖書「ペテロの第一の手紙」における裏返し構造」『北海道言語文化研究』、(20) 1-19、北海道言語研究会。
- 大喜多 紀明、2022b、「新約聖書「ヨハネの第一の手紙」における裏返し構造：Berge が提示したキアスム

- ス構造に基づく検証」『人文×社会』、(7) 87-99、『人文×社会』編集委員会。
- 大林 太良、1979、「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(2) 1-9、日本口承文芸学会。
- 勝俣 隆、2009、『異郷訪問譚・来訪譚の研究—上代日本文学編』、和泉書院。
- 加藤 泰、1979、「済州島の二つの神話の構造分析」『民族学研究』、44(1) 83-90、日本民族学会。
- 木下 順治、1975、「ローマ書二文書説の再検討」『基督教学』、(10)、27-29、日本基督教学会北海道支部。
- 須藤 伊知郎、2006、「マタイ福音書における ἔθνος : 28 章 19 節の πάντα τὰ ἔθνη はイスラエルを含むか」『新約学研究』、34、5-18、日本新約学会。
- 辻 学、2005、「聖書：歴史的・批判的解釈の限界と可能性」『関西学院大学キリスト教と文化研究』、(7)、45-57、関西学院大学。
- 日本聖書協会、1989、『聖書』、日本聖書協会。
- 村井 源、2009、「マルコ福音書の多層集中構造」『日本カトリック神学会誌』、(20)、65-95、日本カトリック神学会。
- 村井 源、2021、「ローマの信徒への手紙の修辞構造」『聖書の修辞構造』、2021-06-17、村井 源、
http://bible.literarystructure.info/bible/45_Romans_1.html#1-1 (2022、11、03 閲覧)。
- 森 彬、1996、「ローマ書全体の集中構造について」『神学』(58) 146-178、東京神学大学。
- 森 彬、2007、『ルカ福音書の集中構造』、キリスト新聞社。
- 依田 千百子、1982、「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(5) 47-57、日本口承文芸学会。
- Buy, P. J., & Muswubi, A. T. (2015). Uncovering key biblical principle in handling disputable music matters in missio dei perspective--a basic theoretical study. *In Die Skriflig*, 49(1), 1-13.
- DeSilva, D. A. (2008). X Marks the Spot? A Critique of the Use of Chiasmus in Macro-Structural Analyses of Revelation. *Journal for the Study of the New Testament*, 30(3), 343-371.
- Drake, H. (1996¹⁶). *Romans: A House Church Manifesto?*, viewed 01 Nov. 2022, from <http://www.hccentral.com/romans/index.html>.
- Heath, D. M. (2012). Chiastic structures in Hebrews: with a focus on 1: 7-14 and 12: 26-29. *Neotestamentica*, 46(1), 61-82.
- Larrington, C. (2002). The Four Funerals in *Beowulf*. *Review of English Studies*, 53(209), 108-108.
- McCoy, B. (2003). Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Biblical Literature. *Chafer Theological Seminary Journal*, 9(2), 17-34.
- Newton, D. (2016). Nephi's Use of Inverted Parallels. *Interpreter: A Journal of Mormon Scripture*, 22, 79-106.
- Robinson, T. (2019). The Chiastic Structure of the Book of Romans. *BIBLICAL CHIASM EXCHANGE*, viewed 03 Nov. 2022, from <https://www.chiasmusxchange.com/wp-content/uploads/2019/10/The-Chiastic-Structure-of-the-Book-of-Romans-BCE.pdf>.
- Vickerman, E. M. (2022). *Chiasmus as constraint: Negotiating with narrative form in contemporary creative writing*

¹⁶この出版年は、もともになる Drake の修士論文のものを便宜的に表記したものである。この「Romans: A House Church Manifesto?」の出版年は不明である。

practice (Doctoral dissertation, Queensland University of Technology).

Welch, J. W. (1981). Chiasmus in the New Testament. *Chiasmus in Antiquity: Structures, Analyses, Exegesis*, Ed.

John W. Welch. Hildesheim: Gerstenberg, 211-249.

執筆者紹介

氏名：大喜多 紀明

Email：ohkitan@yahoo.co.jp